研究課題　武田流弓馬故実書の形成過程に関する史料学的研究

研究経費　五五万三四五八円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　阿部能久（聖学院大学）

　所内共同研究者　高橋慎一朗・林晃弘

　所外共同研究者　大澤 泉（鎌倉歴史文化交流館）・石井千紘（鎌倉国宝館）

研究の概要

（１）課題の概要

　流鏑馬・笠懸・犬追物などの騎射の武芸は、鎌倉時代の武士の鍛錬手段として広く行われたものであるが、室町時代以降は衰退に向かい、江戸時代に入って弓馬故実として再構成された。とりわけ流鏑馬は、現代まで伝承されて各地の神社祭礼などの際に執行され、国際的にも関心が高い。現代に伝わる流鏑馬などの弓馬故実は、主に武田流と小笠原流に大別され、鎌倉時代から続く鶴岡八幡宮の流鏑馬においても、両流によって流鏑馬の奉仕がなされている。しかし、戦国時代から江戸時代にかけて展開した弓馬故実の形成過程はかなり複雑であり、いまだ明確にされてはいない。  
　本共同研究は、鎌倉の金子家に伝来した学界未紹介の武田流弓馬故実書群の目録作成と原本調査による奥書の分析を通じて、その史料群としての性格を明らかにし、中世から近世にかけての弓馬故実の形成・伝承過程と、現代鎌倉を代表する伝統行事である流鏑馬故実の歴史的系譜を解明することをめざすものである。

（２）研究の成果

　前年度に作成・公開した冊子分の目録に漏れていた冊子を、新たに二二点確認することができた。また、巻子の史料群五〇点につき、簡易撮影と目録作成をおこない、とりわけ鳴弦の作法に関わる史料が多いという特徴を明らかにした。さらに、「故実袋」と称される、武家故実に関わる、紙や紐を用いた小型の模型史料群についても調査をおこない、包袋の記載から、これらが江戸後期の熊本藩士・志水隼太正房の手によって整えられたものであることが判明した。  
　熊本県立図書館の調査では、幕末に竹原家から熊本藩士・井上平太に武田流故実が伝授されたことを裏付ける史料を確認することができた。  
　本研究では、現在は鎌倉に伝わる武田流武家故実が、江戸時代の熊本藩で体系化され、井上平太氏、金子有鄰氏を通じて鎌倉へもたらされたという伝播の過程を、熊本藩細川　関係史料の研究蓄積のある史料編纂所との共同研究をおこなうことによって、明確にあとづけることができた。